

まちづくりを巡るメタステレオタイプの情報が ステレオタイプに与える影響分析

野添 愛美¹・白柳 洋俊²・倉内 慎也³・坪田 隆宏⁴

¹ 学生会員 愛媛大学 大学院理工学研究科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)

E-mail: nozoe.ami.18@cee.ehime-u.ac.jp

² 正会員 愛媛大学特任講師 大学院理工学研究科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)

E-mail: shirayanagi@cee.ehime-u.ac.jp (Corresponding Author)

³ 正会員 愛媛大学准教授 大学院理工学研究科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)

E-mail: kurauchi@cee.ehime-u.ac.jp

⁴ 正会員 愛媛大学特任講師 大学院理工学研究科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3)

E-mail: t.tsubota@cee.ehime-u.ac.jp

歴史的・文化的文脈に過度に固執し、自分たちが住むまちを特定の様式に単純化・固定化しようとするステレオタイプは、歴史文化の継承を困難な状況に陥らせる恐れがあり、まちづくりの展開に影響を及ぼすものと考えられる。本研究では、ステレオタイプに与える影響要因として、他者が自分達のまちに対して抱くステレオタイプに関する情報をメタステレオタイプの情報と呼称し、当該情報の影響を実証的に検証した。分析の結果、第 1 に自集団イメージと一致しているメタステレオタイプの情報は、ステレオタイプを高めること、第 2 に自集団イメージと一致しないメタステレオタイプの情報は、その情報が望ましくない場合に、まちづくりに関する知識を有する者のステレオタイプを高めることを明らかにした。

Key Words: *stereotype, meta-stereotype information, collaborative works*

1. 背景

(1) まちづくりに対する主体的な参加

地方都市において地域の衰退が見られる中、地域の歴史的・文化的資源の活用によって交流人口の増加を目指す取り組みが全国各地で展開されている。こうした取り組みは行政と当該地域で生活を営む住民の協働なくして実現することは困難だと考えられ、したがって、まちづくり活動への住民の主体的な参加が不可欠な役割を担う場合が少なくない。実際、住民が地域固有の文化に着目した政策や事業を企画し、そのアイデアや創意工夫により交流人口の増加を図ろうとする地域協働の取り組みが全国各地で実施されつつある。しかし、まちづくり活動を進める上で、地域住民のアイデアや創意工夫を重んじる余り、時として地域の実情に合わない奇抜な提案がなされ、その提案が地域に根付かないこともある。そればかりか、住民間での取り組み姿勢に温度差を生じさせ、場合によっては意見対立が先鋭化し、地域コミュニティの

分断を招く恐れもある。

以上は、住民がまちづくり活動に主体的に参画する際に生じる問題だと考えられる。次節で述べるように、本稿では自分達が住むまちを特定の様式に単純化・固定化しようとする信念を「ステレオタイプ」と呼称し、住民のまちづくり活動におけるステレオタイプの問題について検討する。

(2) まちづくりを巡るステレオタイプの問題

Lippmann¹⁾は、我々は広く共有されている単純化・固定化された観念やイメージ、思考の枠組みに基づき物事を理解していると唱え、こうした固定観念を「ステレオタイプ」と呼んだ。ステレオタイプは、人間の物事に対する認知過程に必然的に付随するものと捉えられる。つまり我々は複雑な物事を取り扱うだけの十分な能力や認知資源を有しておらず、そのため雑多な事象を縮約化したステレオタイプに基づいて物事を再構成することにより、その認知を容易にしていると説明される²⁾。ただし、

ステレオタイプは物事に関する有用な情報が凝縮されている重要な認知ツールである一方で、物事に関する粗略な仮説に過ぎないため、トップダウン的に情報処理が実行されることでその理解が単純化・固定化してしまうとの弊害を有することが指摘されている³⁾。

まちづくりでは、しばしば、歴史文化的な価値を高めることを目的に、歴史文化的な価値の高い建造物に合わせて周囲の建造物を修景することが試みられる。こうした修景において、歴史文化的な建造物の一部を誇張し、理想化したレプリカ・モデルの作成とその展示を通じて観光客にまちの歴史文化を体験させるモデルカルチャー (model culture)⁴⁾が提案される場合がある。西山・三村⁵⁾は、モデルカルチャーは、一定の文化の受け継ぎが可能であること等を認める一方で、モデル化の段階で無理な時間的圧縮や空間への詰め込みが生じることで文化の歪曲表現に繋がる可能性を指摘している。モデルカルチャーは、建造物をはじめとした有形物のみならず、行事や慣習といった無形物においても対象となるが、いずれの場合であっても、まちに多様な歴史文化の蓄積があるにも関わらず、モデル化の対象として選定された歴史文化的な有形物あるいは無形物についてはわかりやすく展示されるように働きかけがなされる一方で、モデル化の対象に選定されなかった歴史文化的な資源はその保全や活用から除外される恐れがあり、こうした取り組みは偽装文化の創出に繋がるのが危惧され、住民のまちづくりへの参加意欲を減退させ、結果的に歴史に培われた生活や文化の継承が困難な状況に陥る可能性すらある。

以上の問題は、いずれも地域に蓄積された複雑で多様な歴史文化的な文脈を過度に単純化・固定化しようとすることに端を発する問題だと言える。

一般に、ステレオタイプは集団成員という「人」に対して単純化・固定化しようとする信念を指すものであり、本研究で取り扱う町並みといった「有形物」や慣習といった「無形物」に対する信念とは厳密には異なる。しかしながら、近年ではステレオタイプを「物」に対して拡張した研究⁶⁾が蓄積されつつあり、また上記で述べたように、歴史文化的な有形物あるいは無形物に対しても単純化・固定化しようとする信念が見られ、表象上の性質に大きな差はないと想定できる。こうした背景の下、まちづくりを巡って様々なステレオタイプが想定される中、本研究では特に、まちの歴史文化的側面に着目し、地域的・歴史的な文脈から逸脱し、自分達の町並みを特定の様式に単純化・固定化しようとする信念を「まちづくりのステレオタイプ」と定義する。

(3) 本研究の目的

まちづくりを考える上で、住民のまちづくりへの意識に影響を及ぼす要因の理解は重要である。とりわけ偽装

文化の創出や、それによる歴史文化の継承が困難な状況に陥る恐れがあるまちづくりのステレオタイプは、まちづくりの展開に本質的な影響を及ぼすものと考えられる。ただし、地域住民におけるまちづくりのステレオタイプの影響要因について実証的に検討した研究はない。以上の認識の下、本研究では、まちづくりのステレオタイプに着目し、その影響要因を検討することを目的とする。こうした検討を通じて、まちづくり活動におけるステレオタイプについての基本的理解を得ると共に、まちづくりのステレオタイプ問題への対処の示唆を得ることが本稿の狙いである。

2. 研究仮説

(1) ステレオタイプに関する心理要因

これまでの研究において、物事の認知においては、他者から自分がどう見られているのかについての認知、すなわちメタ認知が重要な役割を果たすことが指摘されてきた⁷⁾。メタ認知が果たす役割の重要性は、ステレオタイプにおいても同様であり、他者から自分がどのような単純化・固定化しようとする信念を有しているかで見なされているかについての認知を意味するメタステレオタイプが影響を及ぼすことが報告されている⁸⁾。近年では、日常生活においては、メディアやSNS等を通じた間接的な接触を通して、他者がどのようなステレオタイプを抱いているかが明示される場合が少なく、こうした情報をメタステレオタイプの情報と呼称し、メタステレオタイプの情報がステレオタイプに影響を及ぼすことが報告されている。具体的には、田村⁹⁾は、メタステレオタイプの情報を提示した場合、そのメタステレオタイプの情報が、自集団イメージと呼ばれる自分が所属する集団に対して抱くイメージと一致する場合は、一致しない場合と比較して、ステレオタイプが高まることを示した。これは、自集団イメージに一致するメタステレオタイプの情報は、既に自分自身で保有している自集団に対する信念と合致するため、当該情報がその信念を強化するように働き、その結果ステレオタイプを高めると解釈された。加えて、メタステレオタイプの情報が自集団イメージと一致しない場合であっても、そのメタステレオタイプの情報が望ましくない情報の場合、望ましい情報の場合と比較して、ステレオタイプが高まることを示した。望ましくないメタステレオタイプの情報は、自集団やそこに所属する自己の評価を毀損する可能性があることを示す情報であり、そうした情報が提示されることで、自らの信念の強化が促されると解釈された。さらに、まちづくりを巡っては、まちに関して知識を有している者は、知識を有していない者と比較して、まちづくりに関する

表-1 ステレオタイプの質問項目

項目	質問文
まちづくりに おける ステレオタイプ $\alpha = 0.88^*$	あなたは、道後に建つ建物の窓をすべて道後温泉本館と同じ様に「すだれ」をつけるべきだと思いますか？
	あなたは、道後の町並みをすべて昔ながらの旅館と同じ木造の建物とするべきだと思いますか？
	あなたは、温泉街としての風情を演出するために、道後の建物の軒先すべてに足湯や手湯を設置するべきだと思いますか？
	あなたは、日本最古の湯との道後の印象を演出するために、道後温泉で開催するアートに関するイベントは道後温泉の伝説に由来する「湯玉」と「白鷺」に関連するものに限定するべきだと思いますか？
	あなたは、古来から続く温泉街との道後の印象を高めるために、道後の道はすべて鍔・桜御影石による石畳にするべきだと思いますか？

*: クロンバックの α 係数 (各質問項目の内的整合性を評価する信頼係数)

ステレオタイプが高いことが指摘されている⁹⁾。これは、自分自身はまちに関する知識を十分に認識していると自負するが故に、まちづくりを特定の様式に固定化するステレオタイプの思考に至ると解釈されており、こうしたまちづくりに関わる主体の属性がメタステレオタイプの情報によるステレオタイプへの影響要因となることも考えられる。

さて、上記の自集団イメージとの一致度次元、望ましき次元は、まちづくりの場面では、メディアやSNS等を通じて間接的に接触するメタステレオタイプの情報を構成する次元と捉えられる。この点を考慮すると、メタステレオタイプの情報は、その否定的側面としてまちづくりのステレオタイプに繋がる恐れがあると考えられる。

(2) 本研究の仮説

以上の議論を踏まえて本研究では、メタステレオタイプの情報がまちづくりのステレオタイプに影響について、第1に、自集団イメージと一致しているメタステレオタイプの情報は、自集団イメージと一致していないメタステレオタイプの情報と比較してステレオタイプを高めること、第2に、自集団イメージと一致しないメタステレオタイプの情報は、その情報が望ましくない場合、ステレオタイプを高め、その傾向はまちづくりに関する知識を有している者は、当該知識を有していない者と比較して強いとの仮説として措定した。以下では、愛媛県松山市道後地区を対象とした調査により、本研究の検証を行い、まちづくりを巡るメタステレオタイプの情報がステレオタイプに与える影響を実証的に明らかにする。

3. 研究方法

本研究では、まちづくり関係者に対して、まちづくりを巡るメタステレオタイプの情報を提示する。提示前後の回答者のまちづくりを巡るステレオタイプをアンケート調査に基づき計測し、そのステレオタイプの変化量を指標として、まちづくりを巡るメタステレオタイプの情

報がステレオタイプに与える影響を分析する。

(1) 調査対象地

本研究では、愛媛県松山市道後地区を調査対象地域とした。道後は松山市中心部に近接し、「道後温泉本館」に代表される外湯施設を中心とした温泉街である。伊豫風土記にも記録が残る日本最古の温泉街とされ、現在の道後温泉本館の位置に自噴していた湯を利用した温浴施設とその脇を通る遍路道沿い連なる遍路宿により町が形成されてきた。近代においては入浴客の増加を狙い、初代道後湯之町町長の伊佐庭如矢の主導の下、1895年の道後鉄道開業に合わせて、養生湯の整備に始まる道後温泉本館の改築を実施し、観光地化が進められた。1970年代に、源泉開発とともに内湯を持つ大規模ホテルの開業が相次ぎ、開発に呼応して、道後温泉本館周辺に土産物等を取り扱う店舗の出店が増加した。こうした温泉を基軸とした観光化が進むなか、道後地区には「伊佐爾波神社」や「宝巖寺」など歴史ある社寺も多く残り、多様な歴史文化的な蓄積がいまに伝えられる。近年では、温泉とその周囲の歴史的建造物を保全及び活用することで一層の観光客の増加を目指し、2015年に行政と民間が協働で活性化に取り組む「道後温泉活性化計画」の策定により、宝巖寺の参道となる上人坂周辺をはじめとした3つのエリアを重点整備エリアとした整備が実施されているものの、こうした整備が進む一方で、ホテルの大規模化に伴い、旧来の旅館の撤退が相次いだため、地区内に空き家や空き地が散見される状況にある。

アンケート調査の対象者は、松山市に在住する学生200名とし、その内、100名をまちづくりに関して専門的な教育を受けている学生、残りの100名をまちづくりに関する教育を受けていない学生に回答を要請した。本研究では、前者をまちづくりに関して知識を有している知識有り群、後者をまちづくりに関して知識を有していない知識無し群と定義し、分析する。回答はオンライン形式とし、入力フォームへのアクセス情報を個別に配布し、オンラインにて回答するように要請した。

表-2 メタステレオタイプの情報

一致次元	望ましき次元	提示内容
一致	ポジティブ	道後は、「道後温泉本館」や「飛鳥乃湯泉」、「椿の湯」などの入浴施設が立ち並び、こうした旅館の外にある温泉をめぐる外湯文化が根付く温泉街です。まちなかのいたるところに足湯や手湯などが設置され、湯めぐりが楽しめます。夕方になると浴衣姿でそぞろ歩く観光客があちこちに見られ、温泉情緒を感じることができます。
	ネガティブ	道後では、旅館の外にある入浴施設を巡る外湯文化が残っていますが、入浴後は歩いて旅館に帰る必要があり、雨の日は外湯へ出向くのを躊躇う観光客が見られます。寒い季節ともなると、湯冷めを心配して外湯を敬遠する方も多く、外湯をめぐる観光客であっても肩を震わせながら足早に宿に戻っている姿をしばしば見かけます。
不一致	ポジティブ	道後には、国の重要文化財である「伊佐爾波神社」や一遍上人の誕生地といわれる「宝巖寺」など歴史ある神社や寺が多く残されています。こうした社寺を結ぶ「上人坂」はかつての道後の面影を今に伝える場所となっています。日中は、歴史好きの観光客が多く見られ、思い思いに歴史探訪を楽しんでいます。
	ネガティブ	道後の「上人坂」周辺には老朽化した木造家屋が立ち並び、薄汚れた雰囲気漂っています。その周囲には多くの空き地もあり、物寂しい町並みとなっています。日中でも人通りが少なく、閑散としています。

(2) 心理要因

a) ステレオタイプ

まちづくりのステレオタイプは、先行研究^{9,10)}にて指摘されている「来街者にまちづくりのイメージをわかりやすく表現する記号化された様式」の特徴を参考に、道後のまちづくりを過度に単純化・固定化する取り組みに対する賛否意識を問う5項目を設定した。具体的には、記号化されたまちづくりのイメージとして温泉を取り上げ、道後のまちづくりをこれらのイメージに即して修景すべきかについて、「全く思わない」から「とてもそう思う」の7件法にて回答を要請した。表-1に設定したステレオタイプに関する項目を示す。各項目は、町並みすべてを温泉に即したイメージに固定化・単純化するという極端な施策に対する賛否意識を問うており、「とてもそう思う」と回答する程、ステレオタイプが高いと解釈する。本研究では、メタステレオタイプの情報提示前後にて、信頼性を示すクロンバックの α 係数を算出したところ、十分な信頼性が認められたことから、5項目の加算平均により「ステレオタイプ」尺度を構成した。

b) メタステレオタイプの情報

メタステレオタイプの情報は、既存研究⁹⁾を参考に、提示する情報と自集団イメージとの一致度次元及び、提示する情報の望ましき次元を設定し、観光ガイドブック、行政あるいはまちづくりに関連するウェブサイトに掲載されている情報に基づき、作成した。具体的には、自集団イメージとの一致次元では、自集団イメージを温泉と設定し、「道後には、温浴施設が点在し、湯巡りができる」といった温泉に関する情報を自集団イメージ一致情報とし、「道後には、寺社仏閣が点在し、歴史探訪ができる」といった温泉とは関連しない情報を自集団イメージ不一致情報として設定した。望ましき次元では、「道

後は活気がある」といった情報をポジティブ情報とし、「道後は物寂しい」といった情報をネガティブ情報として設定した。本研究では、上記に示す2次元を組み合わせた4種類のメタステレオタイプの情報を作成した。表-2に設定したメタステレオタイプの情報を示す。

実験参加者には、まちづくり関連群ならびに一般群ともに、設定したメタステレオタイプの情報の内1種類のみを提示した。4種類のメタステレオタイプの情報を提示する実験参加者数は同数となるように調整した。

本研究では、提示したメタステレオタイプの情報に対する実験参加者の妥当性の計測を意図し、当該情報提示後に、提示されたメタステレオタイプの情報に対して「非常に妥当である」から「まったく妥当でない」との項目について、7件法にて評定するように要請し、これを「メタステレオタイプの情報の妥当性認知」とした。

4. 調査結果

(1) アンケートの回収結果

アンケートの回答者の性別は男性135名、女性65名であった。メタステレオタイプの情報の妥当性認知に関して、全回答者の平均値は5.05であった。これは、提示したメタステレオタイプの情報に対して、その妥当性がどちらでもないとの回答を意味する4を上回るものであり、回答者は概ね提示されたメタステレオタイプの情報に関して妥当と評価したと判断した。ただし、メタステレオタイプの情報を妥当とみなしていない回答者も一部観察されたため、本研究では、こうした提示した情報の妥当性が認められないことによる回答へのバイアスを排除するため、メタステレオタイプの情報の妥当性認知におい

て4以上と回答した169名の回答者を分析対象とすることとした。

(2) 分析

a) ステレオタイプの変化

実験参加者群毎、メタステレオタイプの情報毎におけるメタステレオタイプの情報提示前後のステレオタイプの平均値を表-3に示す。知識有り群、知識無し群ともに、自集団イメージと一致したメタステレオタイプの情報を提示した場合、まちづくりのステレオタイプが有意に高くなる、もしくは有意傾向となることが示された。一方で、自集団イメージと一致しないメタステレオタイプの情報を提示した場合、そのメタステレオタイプの情報が望ましくない情報のとき、知識無し群のみ、ステレオタイプが有意に高くなることが示された。

b) 実験条件間の比較

次に、実験参加者毎に事後のステレオタイプから事前のステレオタイプを減じることでステレオタイプの変化量を算出し、実験参加者群ならびに、メタステレオタイプの情報の種類に関して、3要因分散分析を行った結果を表-4に示す。知識×一致度×望ましさの2次交互作用

が有意であったため、単純交互作用及び単純・単純主効果の検定を行った。その結果を表-5及び表-6に示す。メタステレオタイプの情報が望ましくない場合における知識×一致度の単純交互作用が有意であり、下位検定の結果、メタステレオタイプの情報が不一致な情報の場合は、知識の単純・単純主効果が有意であった。このことは、メタステレオタイプの情報が自集団イメージと一致せず、望ましくない場合、知識無し群は知識有り群よりもステレオタイプの促進することを意味する。次に、メタステレオタイプの情報が自集団イメージと一致しない場合における知識×望ましさの単純交互作用が有意であり、下位検定の結果、知識無しの場合は、望ましさの単純・単純主効果が有意であった。このことは、知識無し群は、メタステレオタイプの情報が一致しない情報において、望ましい情報は望ましくない情報よりもステレオタイプが促進することを意味する。さらに、知識無しの場合における一致度×望ましさの単純交互作用が有意であり、下位検定の結果、望ましくない場合は、一致度の単純・単純主効果が有意であった。このことは知識無し群は、望ましくない情報に一致する情報は一致しない情報に比べてステレオタイプ促進することを意味する。

表-3 メタステレオタイプの情報提示前後におけるまちづくりのステレオタイプの比較

知識の有無	メタステレオタイプの情報	情報提示前		情報提示後		観測数	2群の差のt値		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差				
知識有り	一致	ポジティブ	3.55	1.14	3.81	1.40	25	2.08	*
		ネガティブ	3.37	1.30	3.50	1.47	23	1.46	†
	不一致	ポジティブ	3.14	1.66	3.25	1.73	19	0.96	
		ネガティブ	3.58	0.99	3.93	1.16	24	3.17	**
知識無し	一致	ポジティブ	3.36	1.21	3.52	1.33	19	1.50	†
		ネガティブ	3.16	1.31	3.50	1.39	25	2.56	**
	不一致	ポジティブ	3.92	1.56	4.09	1.74	17	1.21	
		ネガティブ	3.01	1.46	2.87	1.59	17	-0.89	

**: $p<0.01$, *: $p<0.05$, †: $p<0.1$

表-4 分散分析結果

変動因	平方和	自由度	F値	p値	
知識	0.27	1	0.84	0.36	
一致度	0.37	1	1.16	0.28	
望ましさ	0.00	1	0.01	0.93	
知識×一致度	0.75	1	2.33	0.13	
知識×望ましさ	0.16	1	0.50	0.48	
一致度×望ましさ	0.05	1	0.15	0.70	
知識×一致度×望ましさ	1.89	1	5.89	0.02	*
誤差	51.57	161			

**: $p<0.01$, *: $p<0.05$, †: $p<0.1$

表-5 単純交互作用の結果

変動因	平方和	自由度	F 値	p 値
望ましい情報における知識×一致度	0.13	1	0.41	0.53
望ましくない情報における知識×一致度	2.50	1	7.81	0.01 **
一致の情報における知識×望ましさ	0.48	1	1.48	0.23
不一致の情報における知識×望ましさ	1.57	1	4.90	0.03 *
知識あり群における一致度×望ましさ	0.67	1	2.08	0.15
知識なし群における一致度×望ましさ	1.27	1	3.95	0.05 *
誤差		161	0.32	

**: $p<0.01$, *: $p<0.05$, †: $p<0.1$

表-6 単純・単純主効果の結果

変動因	平方和	自由度	F 値	p 値
一致かつ望ましい情報における知識	0.10	1	0.31	0.58
一致かつ望ましくない情報における知識	0.44	1	1.36	0.25
不一致かつ望ましい情報における知識	0.04	1	0.19	0.73
不一致かつ望ましくない情報における知識	2.49	1	7.76	0.01 **
知識あり群かつ望ましい情報における一致度	0.20	1	0.63	0.43
知識あり群かつ望ましくない情報における一致度	0.50	1	1.55	0.21
知識なし群かつ望ましい情報における一致度	0.00	1	0.01	0.92
知識なし群かつ望ましくない情報における一致度	2.35	1	7.33	0.01 **
知識あり群かつ一致の情報における望ましさ	0.16	1	0.51	0.48
知識あり群かつ不一致の情報における望ましさ	0.57	1	1.77	0.19
知識なし群かつ一致の情報における望ましさ	0.33	1	1.02	0.31
知識なし群かつ不一致の情報における望ましさ	1.04	1	3.25	0.07 †
誤差		161	0.32	

**: $p<0.01$, *: $p<0.05$, †: $p<0.1$

5. 結論

本研究では、メタステレオタイプの情報がまちづくりのステレオタイプに影響を与えることを実証的に検証した。その結果、第1に、自集団イメージと一致しているメタステレオタイプの情報は、自集団イメージと一致していないメタステレオタイプの情報と比較してステレオタイプを高めること、第2に、自集団イメージと一致しないメタステレオタイプの情報は、その情報が望ましくない場合、まちづくりに関する知識を有している者においてステレオタイプを高めるとの結果が得られた。

以上の結果は、まちづくりに関するステレオタイプの影響要因としてメタステレオタイプの情報が考えられることを示している。なかでも、まちづくりに関する知識を有する者はメタステレオタイプの情報によってステレオタイプが高まりやすい可能性を示している。したがって、こうした状況に陥りやすいことを自覚し、まちづくりに関する助言を行うことが肝要だと考える。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP20K14850 の助成を受けたものです。

REFERENCES

- 1) Lippmann, W. (掛川トミ子訳)：世論，岩波文庫，1987.
- 2) 海保博之，楠見孝：心理学総合辞典，朝倉書店，2006.
- 3) 外林大作，辻正三，島津一夫，能見義博：誠信心理学辞典，誠信書房，1981.
- 4) 三村浩史，中山徹，西山徳明，アデイシャクティラレトナ，小林史彦，王郁：都市空間文化財の地理的成層分析とモデルカルチャー・デザインに関する研究，住宅総合研究財団研究年報，Vol.24，pp.123-136，1998.
- 5) 西山徳明，三村浩史：モデルカルチャーによる都市観光活動設計に関する研究—大阪府堺市を事例として—，第26回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.415-42，1991.
- 6) 田戸岡好香，樋口収，唐沢かおり：食品のネガティブイメージにステレオタイプ抑制が及ぼす影響，心理学研究，Vol.89，No.1，pp.22-28，2008.

- 7) 三宮真智子：メタ認知 学習力を支える高次認知機能，北大路書房，2008.
- 8) 田村恵美：メタステレオタイプの情報が集団間態度と内集団認知に及ぼす影響：メタステレオタイプの情報の望ましさ、及び、自集団ステレオタイプとの一致度に着目して，社会心理学研究，Vol.33，No.1，pp.26-33，2017.
- 9) 白柳洋俊，須藤雅陽，羽鳥剛史：地域の歴史に関する知識が町並み保全意識に与える影響分析—歴史まちづくりを巡る町並み保全活動への参画意識と町並み保全のステレオタイプに着目して—，都市計画論文集，Vol.56，No.3，pp.429-436，2021.
- 10) 中川理：偽装するニッポン，彰国社，1996.

(Received March 6, 2022)